

リスニング授業でのディクテーション指導の効果

上 田 恒 雄

はじめに

ディクテーション（書き取り）は単語のスペリングのテストに過ぎないという批判的な意見もあるが、短期記憶（ワーキングメモリ）とライティング能力とも関連した総合的な能力を必要とするリスニングスキルである（Oller 1979, p. 42）という見解もあり、リスニング力養成方法として英語のディクテーションを授業に取り入れて指導することの効果を確認する必要がある。実際リスニングに関する学習理論においても認知心理学理論の発達に合わせて言語のワーキングメモリの観点からそのプロセスを考察する研究が増えてきていることもディクテーション指導が役立つ可能性を示唆する。リスニングにはボトムアップ処理の自動化が必要であり、パターンを何度も練習することが自動化への方策の一つでもあり、ディクテーションで書き取り練習をすることは反復を促進させることになるので有効なリスニング指導と考えられる。授業で用いるディクテーション法としては、まとまった文章を用いて、短い分割のものから長い分割のものまでを含む“Graduated Dictation”（Field 2003）というやり方を用いて指導を行い、リスニング授業での効果を具体的に検証することがこの拙稿の目的である。

測定方法

教育測定研究所によって開発されたコンピュータを使って受験する CASEC テスト（Computerized Assessment System for English Communication）を用いてディクテーション能力の測定を行った。CASEC は語彙・読解と表現・リスニング・ディ

クテーションの4セクションからなる試験であるが、今回の検証には英語を聞いてタイピングによって文字を入力するディクテーション形式の第4セクションのスコアを利用した。なお、同テストはコンピュータを利用した CAT（コンピュータ適応型テストシステム）であるため45分程の短時間で実施できる上に、習熟度を測る上で妥当なテストである。

測定対象としては2014年4月に文学部グローバル英語学科に入学した学生を被験者に、入学年度の4月、夏休み休暇明けの9月、秋学期終了間際の12月の計3回に加えて、同じ学生が翌年度2年次に進級した後も、4月、7月、9月、12月の年4回受験したスコア結果を検証に用いた。

リスニング指導の進捗に伴い CASEC の該当セクションのスコア結果がどのように変化するかを受験者全体の観点から検証するだけでなく、英語力の違いがディクテーションにどの程度の影響を与えるかを見るために習熟度別のクラス単位の観点からもスコア結果を検証する。なお、クラスは習熟度の高い方から A～D の順となっている。

データ集計・分析

分析データとしては上記でも述べたように、CASEC 試験の Section4（Dictation）のスコアを利用する。データ収集は2014年度は4月、9月、12月の3回で、翌2015年度は4月、7月、9月、12月の4回である。2015年度は7月にもデータを収集した理由は、その年の8月に学生全員約3週間のオーストラリアでの語学研修に参加したことでスコアに何らかの影響を与える可能性があると思われるからである。4月と7月のスコア比較

と4月と9月のスコア比較でどのような差が見られるのかは検討に値する。

最初にスコア分析として平均点の有意差の有無をt検定(対応あり)を使って全体及び各クラス毎に確認する。全体でのt検定結果に関しては被験者数が大きくなれば、有意差が出やすくなる傾向も考慮して、次の分析として一元配置分散分析(ANOVA)を行うこととした。ANOVAにより群間における有意差をさらに詳細に見つけ出すことが可能になる。

結果

まずは平均点の推移をグラフにしたものを全体から順にクラス毎に示す。

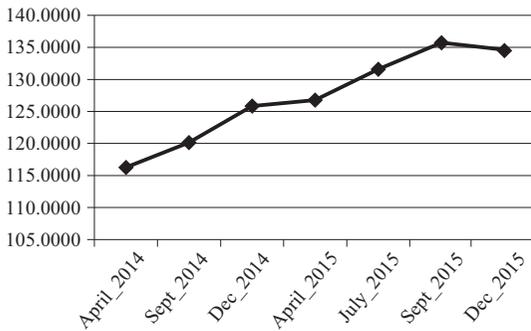


図1 平均値 (全体)

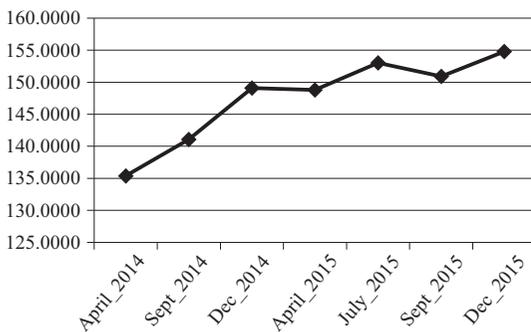


図2 平均値 (Aクラス)

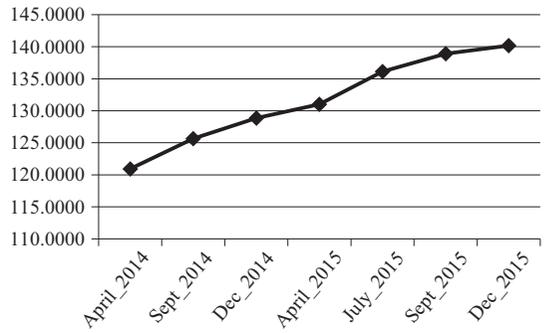


図3 平均値 (Bクラス)

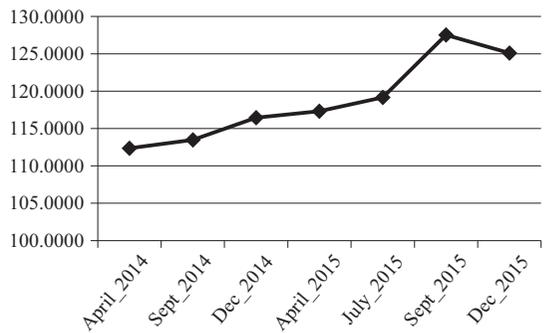


図4 平均値 (Cクラス)

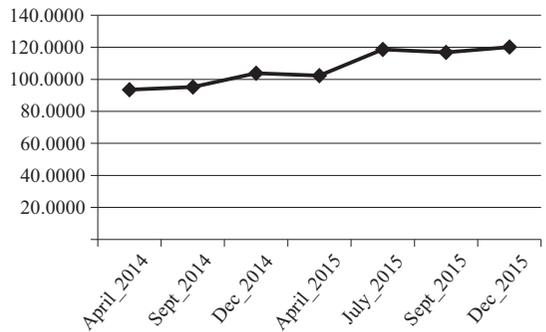


図5 平均値 (Dクラス)

次に平均点に有意差があるかどうかを調べるためのt検定を行った結果を全体から順にクラス毎に示す。

リスニング授業でのディクテーション指導の効果 (上田)

表1 対応サンプルの検定 (全体)

		対応サンプルの差					t 値	自由度	有意確率 (両側)
		平均値	標準偏差	平均値の 標準誤差	差の95%信頼区間				
					下限	上限			
ペア1	April_2014-Dec_2014	-6.67000	37.65931	3.76593	-14.14242	0.80242	-1.771	99	0.080
ペア2	Sept_2014-Dec_2014	-4.27000	29.54943	2.95494	-10.13325	1.59325	-1.445	99	0.152
ペア3	April_2015-July_2015	-5.15044	40.19733	3.78145	-12.64289	2.34201	-1.362	112	0.176
ペア4	Sept_2015-Dec_2015	0.25510	33.42889	3.37683	-6.44697	6.95717	0.076	97	0.940
ペア5	April_2015-Dec_2015	-7.38532	37.50800	3.59261	-14.50651	-0.26414	-2.056	108	0.042
ペア6	April_2014-Dec_2015	-17.56881	36.50352	3.49640	-24.49928	-10.63833	-5.025	108	0.000

表2 対応サンプルの検定 (Aクラス)

		対応サンプルの差					t 値	自由度	有意確率 (両側)
		平均値	標準偏差	平均値の 標準誤差	差の95%信頼区間				
					下限	上限			
ペア1	April_2014-Dec_2014	-15.77778	24.81676	4.77599	-25.59496	-5.96059	-3.304	26	0.003
ペア2	Sept_2014-Dec_2014	-8.59259	23.94587	4.60838	-18.06526	0.88008	-1.865	26	0.074
ペア3	April_2015-July_2015	-3.89286	29.99548	5.66861	-15.52389	7.73818	-0.687	27	0.498
ペア4	Sept_2015-Dec_2015	-3.64286	28.22819	5.33463	-14.58861	7.30289	-0.683	27	0.501
ペア5	April_2015-Dec_2015	-5.67857	26.79836	5.06441	-16.06989	4.71275	-1.121	27	0.272
ペア6	April_2014-Dec_2015	-21.35714	26.87173	5.07828	-31.77691	-10.93737	-4.206	27	0.000

表3 対応サンプルの検定 (Bクラス)

		対応サンプルの差					t 値	自由度	有意確率 (両側)
		平均値	標準偏差	平均値の 標準誤差	差の95%信頼区間				
					下限	上限			
ペア1	April_2014-Dec_2014	-9.00000	34.39884	6.74617	-22.89399	4.89399	-1.334	25	0.194
ペア2	Sept_2014-Dec_2014	-4.26923	28.57909	5.60482	-15.81258	7.27412	-0.762	25	0.453
ペア3	April_2015-July_2015	-6.96296	32.84167	6.32038	-19.95470	6.02877	-1.102	26	0.281
ペア4	Sept_2015-Dec_2015	-0.52174	22.57285	4.70676	-10.28297	9.23949	-0.111	22	0.913
ペア5	April_2015-Dec_2015	-10.43478	29.41216	6.13286	-23.15355	2.28399	-1.701	22	0.103
ペア6	April_2014-Dec_2015	-19.56522	30.36868	6.33231	-32.69762	-6.43281	-3.090	22	0.005

表4 対応サンプルの検定 (Cクラス)

		対応サンプルの差					t 値	自由度	有意確率 (両側)
		平均値	標準偏差	平均値の 標準誤差	差の95%信頼区間				
					下限	上限			
ペア1	April_2014-Dec_2014	-6.50000	22.19414	4.35263	-15.46441	2.46441	-1.493	25	0.148
ペア2	Sept_2014-Dec_2014	-3.16000	25.63149	5.12630	-13.74016	7.42016	-0.616	24	0.543
ペア3	April_2015-July_2015	-0.45000	27.15545	6.07214	-13.15914	12.25914	-0.074	19	0.942
ペア4	Sept_2015-Dec_2015	3.26316	33.80802	7.75609	-13.03179	19.55810	0.421	18	0.679
ペア5	April_2015-Dec_2015	-5.57895	30.13915	6.91440	-20.10555	8.94766	-0.807	18	0.430
ペア6	April_2014-Dec_2015	-11.05263	26.51304	6.08251	-23.83151	1.72625	-1.817	18	0.086

表5 (Dクラス)

		対応サンプルの検定					t 値	自由度	有意確率 (両側)
		対応サンプルの差							
		平均値	標準偏差	平均値の 標準誤差	差の95%信頼区間				
			下限	上限					
ペア1	April_2014-Dec_2014	-9.66667	28.73384	6.27024	-22.74615	3.41282	-1.542	20	0.139
ペア2	Sept_2014-Dec_2014	-9.23810	30.66253	6.69111	-23.19551	4.71932	-1.381	20	0.183
ペア3	April_2015-July_2015	-16.36842	34.57875	7.93291	-33.03485	0.29800	-2.063	18	0.054
ペア4	Sept_2015-Dec_2015	-3.22222	30.61056	7.21498	-18.44450	12.00005	-0.447	17	0.661
ペア5	April_2015-Dec_2015	-18.05556	37.75692	8.89939	-36.83163	0.72052	-2.029	17	0.058
ペア6	April_2014-Dec_2015	-22.61111	19.01126	4.48100	-32.06519	-13.15703	-5.046	17	0.000

続いて一元配置分散分析を行った結果を全体から順にクラス毎に示す(次ページで表6~10)。

考察とまとめ

全体の図1から各クラスごとの図5までのグラフをみると、平均点が上昇している期間もあれば、ほとんど変化が見られない期間もあり、また逆に平均点が下がっている期間もある。一方、最初と最後だけを比較すると1年次4月から2年次12月にかけての点数は全体(17.6点)、A(21.4点)、B(19.6点)、C(11.1点)、D(22.6点)全てのクラスで上昇している。この平均点の上昇分の点差が統計的に有意かどうかをt検定を用いて検証した結果が表1から表5である。それぞれの期間ごとの検定結果の中で $P < 0.05$ となり、平均点に統計的な有意差が見られるのは、全体では1年次の4月から2年次の12月にかけてと2年次の4月から12月にかけて、Aクラスでは1年次の

4月から12月にかけてと1年次の4月から2年次の12月にかけて、Bクラスでは1年次の4月から2年次の12月にかけてのみ、Cクラスではどこにも統計的に有意差が見られず、Dクラスでは1年次の4月から2年次の12月のみとなっている。この結果から、9ヶ月以上期間が長くなればなるほど概して平均点に有意差が現れやすい傾向が見られる。9月から12月のように3ヶ月間でも平均点が数字上は上昇していても、その上昇分の点差が統計的には有意でないことがほとんどである。言い換えれば指導の効果は短期間ではなかなか数字上には現れてこないとも言える。

続いて各平均点を一元配置分散分析して、ペアごとの比較を行った結果を見てみると、クラスを併せた全体平均点に関しては、1年次の平均点はその時期の平均点とも有意差が見られないが、2年次の平均点とはすべて有意差がある。Aクラスに関しては1年次の4月の平均点は12月の平均

リスニング授業でのディクテーション指導の効果 (上田)

表6 ベアごとの比較 (全体)

測定変数名：MEASURE_1		平均値の差 (I-J)	標準誤差	有意確率 ^b	95% 平均差信頼区間 ^a	
(I) 時期					下限	上限
1	2	-2.429	3.998	0.545	-10.363	5.506
	3	-7.020	3.831	0.070	-14.624	0.584
	4	-9.265*	3.451	0.009	-16.116	-2.415
	5	-14.745*	3.737	0.000	-22.162	-7.328
	6	-16.531*	3.439	0.000	-23.356	-9.706
	7	-16.276*	3.780	0.000	-23.778	-8.773
2	1	2.429	3.998	0.545	-5.506	10.363
	3	-4.592	3.004	0.130	-10.553	1.369
	4	-6.837	4.031	0.093	-14.838	1.164
	5	-12.316*	3.468	0.001	-19.200	-5.433
	6	-14.102*	3.550	0.000	-21.148	-7.056
	7	-13.847*	3.274	0.000	-20.345	-7.349
3	1	7.020	3.831	0.070	-0.584	14.624
	2	4.592	3.004	0.130	-1.369	10.553
	4	-2.245	3.467	0.519	-9.125	4.635
	5	-7.724*	3.147	0.016	-13.971	-1.478
	6	-9.510*	3.116	0.003	-15.695	-3.325
	7	-9.255*	3.417	0.008	-16.037	-2.473
4	1	9.265*	3.451	0.009	2.415	16.116
	2	6.837	4.031	0.093	-1.164	14.838
	3	2.245	3.467	0.519	-4.635	9.125
	5	-5.480	4.215	0.197	-13.845	2.886
	6	-7.265*	3.140	0.023	-13.498	-1.033
	7	-7.010	3.925	0.077	-14.800	0.780
5	1	14.745*	3.737	0.000	7.328	22.162
	2	12.316*	3.468	0.001	5.433	19.200
	3	7.724*	3.147	0.016	1.478	13.971
	4	5.480	4.215	0.197	-2.886	13.845
	6	-1.786	3.309	0.591	-8.353	4.782
	7	-1.531	3.267	0.640	-8.015	4.954
6	1	16.531*	3.439	0.000	9.706	23.356
	2	14.102*	3.550	0.000	7.056	21.148
	3	9.510*	3.116	0.003	3.325	15.695
	4	7.265*	3.140	0.023	1.033	13.498
	5	1.786	3.309	0.591	-4.782	8.353
	7	0.255	3.377	0.940	-6.447	6.957
7	1	16.276*	3.780	0.000	8.773	23.778
	2	13.847*	3.274	0.000	7.349	20.345
	3	9.255*	3.417	0.008	2.473	16.037
	4	7.010	3.925	0.077	-0.780	14.800
	5	1.531	3.267	0.640	-4.954	8.015
	6	-0.255	3.377	0.940	-6.957	6.447

推定周辺平均に基づいた。

*. 平均値の差は .05 水準で有意である。

b. 多重比較の調整：最小有意差（調整無しに等しい）

表7 ペアごとの比較 (Aクラス)

測定変数名：MEASURE_1		平均値の差 (I-J)	標準誤差	有意確率 ^b	95% 平均差信頼区間 ^a	
(I) 時期					下限	上限
1	2	-7.185	3.713	0.064	-14.818	0.448
	3	-15.778*	4.776	0.003	-25.595	-5.961
	4	-14.889*	4.483	0.003	-24.103	-5.674
	5	-20.889*	5.083	0.000	-31.337	-10.441
	6	-17.148*	6.302	0.011	-30.102	-4.194
	7	-20.630*	5.216	0.001	-31.350	-9.909
2	1	7.185	3.713	0.064	-0.448	14.818
	3	-8.593	4.608	0.074	-18.065	0.880
	4	-7.704	5.259	0.155	-18.514	3.106
	5	-13.704*	5.251	0.015	-24.497	-2.910
	6	-9.963	6.203	0.120	-22.713	2.787
	7	-13.444*	5.701	0.026	-25.163	-1.726
3	1	15.778*	4.776	0.003	5.961	25.595
	2	8.593	4.608	0.074	-0.880	18.065
	4	0.889	5.053	0.862	-9.497	11.275
	5	-5.111	5.516	0.363	-16.450	6.228
	6	-1.370	6.546	0.836	-14.825	12.085
	7	-4.852	6.172	0.439	-17.538	7.834
4	1	14.889*	4.483	0.003	5.674	24.103
	2	7.704	5.259	0.155	-3.106	18.514
	3	-0.889	5.053	0.862	-11.275	9.497
	5	-6.000	5.461	0.282	-17.225	5.225
	6	-2.259	5.190	0.667	-12.927	8.408
	7	-5.741	5.255	0.285	-16.543	5.061
5	1	20.889*	5.083	0.000	10.441	31.337
	2	13.704*	5.251	0.015	2.910	24.497
	3	5.111	5.516	0.363	-6.228	16.450
	4	6.000	5.461	0.282	-5.225	17.225
	6	3.741	5.389	0.494	-7.337	14.818
	7	0.259	5.961	0.966	-11.993	12.512
6	1	17.148*	6.302	0.011	4.194	30.102
	2	9.963	6.203	0.120	-2.787	22.713
	3	1.370	6.546	0.836	-12.085	14.825
	4	2.259	5.190	0.667	-8.408	12.927
	5	-3.741	5.389	0.494	-14.818	7.337
	7	-3.481	5.533	0.535	-14.856	7.893
7	1	20.630*	5.216	0.001	9.909	31.350
	2	13.444*	5.701	0.026	1.726	25.163
	3	4.852	6.172	0.439	-7.834	17.538
	4	5.741	5.255	0.285	-5.061	16.543
	5	-0.259	5.961	0.966	-12.512	11.993
	6	3.481	5.533	0.535	-7.893	14.856

推定周辺平均に基づいた。

*. 平均値の差は .05 水準で有意である。

b. 多重比較の調整：最小有意差（調整無しに等しい）

リスニング授業でのディクテーション指導の効果（上田）

表8 ペアごとの比較（Bクラス）

測定変数名：MEASURE_1		平均値の差 (I-J)	標準誤差	有意確率 ^b	95% 平均差信頼区間 ^a	
(I) 時期					下限	上限
1	2	-4.217	7.264	0.567	-19.282	10.847
	3	-7.304	7.190	0.321	-22.216	7.607
	4	-9.130	7.703	0.249	-25.106	6.845
	5	-16.696*	6.194	0.013	-29.541	-3.850
	6	-19.043*	6.085	0.005	-31.663	-6.424
	7	-19.565*	6.332	0.005	-32.698	-6.433
2	1	4.217	7.264	0.567	-10.847	19.282
	3	-3.087	6.259	0.627	-16.066	9.893
	4	-4.913	6.982	0.489	-19.394	9.568
	5	-12.478	6.319	0.061	-25.583	0.627
	6	-14.826*	5.624	0.015	-26.489	-3.163
	7	-15.348*	4.818	0.004	-25.339	-5.356
3	1	7.304	7.190	0.321	-7.607	22.216
	2	3.087	6.259	0.627	-9.893	16.066
	4	-1.826	6.727	0.789	-15.777	12.125
	5	-9.391	6.738	0.177	-23.364	4.581
	6	-11.739*	4.674	0.020	-21.433	-2.045
	7	-12.261*	4.786	0.018	-22.186	-2.336
4	1	9.130	7.703	0.249	-6.845	25.106
	2	4.913	6.982	0.489	-9.568	19.394
	3	1.826	6.727	0.789	-12.125	15.777
	5	-7.565	7.069	0.296	-22.224	7.094
	6	-9.913	4.966	0.058	-20.212	0.386
	7	-10.435	6.133	0.103	-23.154	2.284
5	1	16.696*	6.194	0.013	3.850	29.541
	2	12.478	6.319	0.061	-0.627	25.583
	3	9.391	6.738	0.177	-4.581	23.364
	4	7.565	7.069	0.296	-7.094	22.224
	6	-2.348	5.571	0.678	-13.901	9.205
	7	-2.870	6.160	0.646	-15.644	9.905
6	1	19.043*	6.085	0.005	6.424	31.663
	2	14.826*	5.624	0.015	3.163	26.489
	3	11.739*	4.674	0.020	2.045	21.433
	4	9.913	4.966	0.058	-0.386	20.212
	5	2.348	5.571	0.678	-9.205	13.901
	7	-0.522	4.707	0.913	-10.283	9.239
7	1	19.565*	6.332	0.005	6.433	32.698
	2	15.348*	4.818	0.004	5.356	25.339
	3	12.261*	4.786	0.018	2.336	22.186
	4	10.435	6.133	0.103	-2.284	23.154
	5	2.870	6.160	0.646	-9.905	15.644
	6	0.522	4.707	0.913	-9.239	10.283

推定周辺平均に基づいた。

*. 平均値の差は .05 水準で有意である。

b. 多重比較の調整：最小有意差（調整無しに等しい）

表9 ペアごとの比較 (Cクラス)

測定変数名：MEASURE_1		平均値の差 (I-J)	標準誤差	有意確率 ^b	95% 平均差信頼区間 ^a	
(I) 時期					下限	上限
1	2	-0.947	6.839	0.891	-15.315	13.420
	3	-2.158	4.842	0.661	-12.331	8.015
	4	-5.474	4.684	0.258	-15.315	4.368
	5	-4.789	6.506	0.471	-18.459	8.880
	6	-14.316*	5.036	0.011	-24.895	-3.736
2	1	0.947	6.839	0.891	-13.420	15.315
	3	-1.211	6.219	0.848	-14.277	11.856
	4	-4.526	6.231	0.477	-17.617	8.565
	5	-3.842	7.108	0.595	-18.776	11.092
	6	-13.368	7.400	0.088	-28.915	2.179
3	1	2.158	4.842	0.661	-8.015	12.331
	2	1.211	6.219	0.848	-11.856	14.277
	4	-3.316	5.202	0.532	-14.246	7.614
	5	-2.632	4.094	0.528	-11.233	5.970
	6	-12.158	6.094	0.061	-24.962	0.646
4	1	5.474	4.684	0.258	-4.368	15.315
	2	4.526	6.231	0.477	-8.565	17.617
	3	3.316	5.202	0.532	-7.614	14.246
	5	0.684	6.288	0.915	-12.526	13.895
	6	-8.842	6.317	0.179	-22.114	4.430
5	1	4.789	6.506	0.471	-8.880	18.459
	2	3.842	7.108	0.595	-11.092	18.776
	3	2.632	4.094	0.528	-5.970	11.233
	4	-0.684	6.288	0.915	-13.895	12.526
	6	-9.526	8.036	0.251	-26.409	7.356
6	1	-6.263	5.959	0.307	-18.783	6.257
	2	14.316*	5.036	0.011	3.736	24.895
	3	13.368	7.400	0.088	-2.179	28.915
	4	12.158	6.094	0.061	-0.646	24.962
	5	8.842	6.317	0.179	-4.430	22.114
7	1	9.526	8.036	0.251	-7.356	26.409
	2	3.263	7.756	0.679	-13.032	19.558
	3	11.053	6.083	0.086	-1.726	23.832
	4	10.105	6.538	0.140	-3.631	23.841
	5	8.895	6.052	0.159	-3.821	21.610
7	4	5.579	6.914	0.430	-8.948	20.106
	5	6.263	5.959	0.307	-6.257	18.783
7	6	-3.263	7.756	0.679	-19.558	13.032

推定周辺平均に基づいた。

*. 平均値の差は .05 水準で有意である。

b. 多重比較の調整：最小有意差（調整無しに等しい）

リスニング授業でのディクテーション指導の効果（上田）

表10 ペアごとの比較（Dクラス）

測定変数名：MEASURE_1		平均値の差 (I-J)	標準誤差	有意確率 ^b	95% 平均差信頼区間 ^a	
(I) 時期					下限	上限
1	2	4.167	8.144	0.616	-13.016	21.349
	3	-5.778	6.002	0.349	-18.441	6.885
	4	-4.556	7.491	0.551	-20.361	11.250
	5	-21.333*	7.270	0.009	-36.671	-5.995
	6	-19.389*	6.267	0.007	-32.611	-6.167
2	7	-22.611*	4.481	0.000	-32.065	-13.157
	1	-4.167	8.144	0.616	-21.349	13.016
	3	-9.944	7.429	0.198	-25.618	5.729
	4	-8.722	10.913	0.435	-31.747	14.303
	5	-25.500*	8.885	0.011	-44.246	-6.754
3	6	-23.556*	10.039	0.031	-44.736	-2.375
	7	-26.778*	7.079	0.001	-41.713	-11.843
	1	5.778	6.002	0.349	-6.885	18.441
	2	9.944	7.429	0.198	-5.729	25.618
	4	1.222	8.234	0.884	-16.149	18.594
4	5	-15.556*	6.405	0.027	-29.070	-2.042
	6	-13.611*	6.349	0.047	-27.006	-0.216
	7	-16.833*	6.199	0.015	-29.913	-3.754
	1	4.556	7.491	0.551	-11.250	20.361
	2	8.722	10.913	0.435	-14.303	31.747
5	3	-1.222	8.234	0.884	-18.594	16.149
	5	-16.778	8.375	0.061	-34.448	0.893
	6	-14.833	7.884	0.077	-31.466	1.800
	7	-18.056	8.899	0.058	-36.832	0.721
	1	21.333*	7.270	0.009	5.995	36.671
6	2	25.500*	8.885	0.011	6.754	44.246
	3	15.556*	6.405	0.027	2.042	29.070
	4	16.778	8.375	0.061	-0.893	34.448
	6	1.944	7.098	0.787	-13.030	16.919
	7	-1.278	6.382	0.844	-14.743	12.187
7	1	19.389*	6.267	0.007	6.167	32.611
	2	23.556*	10.039	0.031	2.375	44.736
	3	13.611*	6.349	0.047	0.216	27.006
	4	14.833	7.884	0.077	-1.800	31.466
	5	-1.944	7.098	0.787	-16.919	13.030
7	6	-3.222	7.215	0.661	-18.444	12.000
	1	22.611*	4.481	0.000	13.157	32.065
	2	26.778*	7.079	0.001	11.843	41.713
	3	16.833*	6.199	0.015	3.754	29.913
	4	18.056	8.899	0.058	-0.721	36.832
7	5	1.278	6.382	0.844	-12.187	14.743
	6	3.222	7.215	0.661	-12.000	18.444

推定周辺平均に基づいた。

*. 平均値の差は .05 水準で有意である。

b. 多重比較の調整：最小有意差（調整無しに等しい）

点との間に早くも有意差が見られ、2年次の平均点とはすべて有意差が見られる。Bクラスに関しては1年次の平均点はどの時期の平均点とも有意差は見られず、2年次の7月になって初めて有意差が確認できる。Cクラスに関しては少し特殊な結果を示し、1年次4月の平均点と有意差が見られるのは唯一2年次9月の平均点との間のみである。Dクラスに関してはBクラスとほぼ同じ結果を示し、有意差が見られるのは2年次7月の平均点との間からとなっている。

以上の結果からディクテーション指導の効果が数値として現れてくるのには時間がかかることがわかる。このことはディクテーションを継続的に長期に渡り用いることはリスニング指導法として有効な方法であるとも言える。

参考文献

- 茅野潤一郎 (2006) 「ディクテーションとシャドーイングによる指導法が聴解力に与える効果」『*Language Education and Technology*』第43号, 外国語教育メディア学会, 95-109
- 阪上辰也 (2014) 「リスニング能力向上のためのディクテーションを中心とした授業実践」『*広島外国語教育研究*』17, 167-172
- 杉浦正利・竹内彰子・馬場今日子 (2002) 「リスニング能力養成のための自律学習：ディクテーションの効果」『*言語文化論集*』23(2), 名古屋大学言語文化部, 105-121.
- Field, J. (2003). Promoting perception: Lexical segmentation in L2 listening. *ELT Journal*, 57, 324-334.
- John W. Oller, Jr. (1979). *Language Tests at School*. London: Longman.
- Sugawara, Y. (1999). Dictation and listening comprehension: Does dictation promote listening comprehension?. *Language Laboratory*, 36, 33-50.
- CASEC: <http://casec.evidus.com/test-summary/>